

今後の見通しのポイント

春シラス漁：低調であった前年並み

1. 海況の概況

潮岬沖の黒潮は、2017 年の 8 月以降、離岸傾向が継続し、本年に入っても 4 月中旬まで離岸する状況が続いています（下表）。国立研究開発法人水産研究・教育機構の情報によると、本年 5～6 月における潮岬沖の黒潮は離岸傾向が継続すると予測されており、春季シラス漁期である 5～6 月前半は離岸して推移すると考えられます。

表 潮岬沖における黒潮の離岸距離 単位：海里 (1 海里=1,852m)

年\月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
2022年	176	156	150	166	174	154	218	158	165	139	145	146
2023年	171	190	188	126	195	191	171	145	145	100	119	104
2024年	93	115	136	121	99	95	85	96	133	109	119	136
2025年	160	189	118	148								

※本年11月は上旬まで、網がけは離岸傾向を示す

※表中の値は海上保安庁「海洋速報」のデータから算出

2. カタクチイワシ卵の出現量および漁況の概要

本年 1～3 月の日向灘～紀伊水道外域における調査では、カタクチイワシ産卵量（暫定値）は前年の 94%、平年（2014～2023 年の平均値）の 54% となり、前年並で、平年を下回る水準でした。また、大阪湾内では、本年 4 月の卵密度が過去 5 年平均の 2%、平年（1985 年～2024 年の平均値）の 11% となり、過去 5 年平均および平年を大きく下回りました。

本年の紀伊水道周辺における和歌山県の春季シラス漁は、4 月中旬までやや低調に推移している模様です。

3. 漁況の予測

大阪湾で春季に漁獲の対象となるシラスは、漁期前半は外海域（日向灘～紀伊水道）で発生し補給されるイワシシラス（カタクチイワシ、ウルメイワシ、マイワシの 3 種）が主体となります。このため、大阪湾での春季シラス漁の好、不漁は外海域での発生量が多いか少ないか、さらにそれらがシラスとなって大阪湾まで補給されるかどうかにより大きく影響されます。また、漁期後半では大阪湾内で生まれたカタクチシラス（内海発生群）の加入状況が漁模様に大きく影響します。

前年（2024 年）は、黒潮が潮岬沖で大きく離岸し、紀伊水道からのシラスの補給は期待できない状況で、漁獲は 5 月下旬まで低調に推移しました。5 月末以降に大阪湾内発生と推測される群の加入がみられましたが、6 月中旬まで前年同時期を下回る漁獲が続きました。なお、シラスの種組成は、5 月下旬時点でカタクチシラスが 95% 以上を占め、5

月末以降はほぼカタクチシラスのみとなりました。

本年は、潮岬沖の黒潮は離岸傾向が継続するという予測に加え、外海でのカタクチイワシの発生が近年同様、低水準と考えられることや、紀伊水道周辺域におけるシラスの漁模様から、大阪湾内へのカタクチシラスの来遊量は、低調であった前年並みの水準と推測されます。

内海発生群については、通常、6 月中～下旬から本格的な加入が始まりますが、近年は、5 月下旬～末頃から加入が始まる年もみられます。加入時期が早まる要因としては、4 月～5 月にかけての水温の影響が考えられており、本年の水温は現在のところ平年より高めに推移しています。今後も高めの水温が継続し、カタクチイワシの産卵の活発化が早まった場合、今期は 5 月下旬～末頃から内海発生群が加入する可能性があります、この群れの加入については現時点では不確実な状況です。

これらのことから、本年の春季シラス漁(5～6 月前半)は、低調であった前年並みの漁となるでしょう。

なお、今後の大阪湾内発生群の状況については、5 月中旬に大阪湾におけるカタクチイワシの産卵情報を、また、夏季シラス漁、マイワシ、カタクチイワシ漁については例年どおり 6 月上旬に漁況予報を、それぞれ発表する予定ですので、参考にしてください。